

ユダヤ系家庭におけるホロコーストの記憶の継承

—第2・第3世代の選択に着目して—

国際協力コース 五十嵐穂乃花

ユダヤ人大量殺戮であるホロコーストから80年以上が経過し、現在、その加害者と被害者がほぼ不在になりつつある。近年、ホロコーストの記憶はグローバル化され、人権尊重などの普遍的な価値観の中に位置付けられるようになった。その記憶継承に非ユダヤ人が参加するようになったこと、ホロコーストから人権といった教育テーマに関わる価値が見出されてきたことなどが、その背景にある。

ホロコーストの記憶の世代間継承に着目した先行研究では、サバイバーである第1世代からその子どもの第2世代への継承が注目されがちであり、第2世代や孫である第3世代は、記憶を受け止める立場としてしか描かれず、継承する/しない行為の主体としての姿が見えてこない。ホロコーストの記憶がグローバル化し、普遍的な価値と結び付けられていく中で、世代交代とともに消えていく個人的な記憶を次世代はどのように扱っているのかを明らかにする必要があるだろう。

本研究は、ユダヤ系家庭において、ホロコーストに関わる個人的な記憶が、第1世代によってどのように継承され、第2・第3世代はその記憶とどのように向き合っているかを明らかにすることを目的とする。その際、第2・第3世代から次世代への記憶の継承にも焦点を当て、彼らが記憶を継承するか否かという選択に着目する。そこで、第2・第3世代の在日ユダヤ系男性にインタビュー調査を行い、記憶の家庭内継承について分析した。また、その特徴を明らかにするため、公的な空間である博物館における記憶継承の特徴についても調査した。

調査の結果、次のことが明らかになった。まず、生まれ育った家庭において、個人的なホロコーストの記憶は、第1世代の直接的な語りだけでなく、彼らの沈黙やその話題をタブー視する環境からも、記憶の存在や思いが次世代へと継承されていたのである。語らない/語れない第1世代の姿やホロコーストをタブー視する環境から、第3世代は第1世代が抱える、忘れたいという思いや記憶の存在を感じ取っていた。次に、第2・第3世代の日本にある現在の家庭では、記憶を継承するか否かという選択は、ホロコーストに対する解釈や現在の生活などに基づいて行われていた。犠牲者である親族が体験したと思われる最期を歴史に落とし込んで子どもに語り継いだり、自身とホロコーストの関係を人権と関連付け、講演会で日本の次世代へと語り継いだりしている者がいた。また、ポジティブなことに目を向けることをユダヤ的な考え方と捉え、ネガティブなことにはあえて目を向けない者や、子どもにはある程度語り継ぎ、ホロコーストの記念イベントにも参加するが、自身の生活を考慮して家庭では頻りに語らない者もいた。サバイバーや記念イベントが少ない日本では、第2世代・第3世代がホロコーストについて否応なしに想起させられる機会が少なくなる傾向にあるのかもしれない。さらに、日本の博物館では、ホロコーストが人権尊重や戦争防止などの概念に結び付けられ、それらの実現のため、忘れずに次世代へ

ユダヤ系家庭におけるホロコーストの記憶の継承

—第2・第3世代の選択に着目して—

と継承されることが求められている一方で、家庭におけるホロコーストの記憶継承はそのような枠組みの中に収まるものではなかった。

ユダヤ系家庭において、ホロコーストの個人的な記憶は、第1世代によって意図的・偶発的な過程を通じて第2・第3世代へと継承され、次世代である彼らは、自身の考え方や生活に基づいて、子どもたちにその記憶を語り継ぐか否かを決めていた。彼らは、第1世代から受け継いだ記憶に多様な意味付けや独自の解釈を行いながら、継承する/しないという行為を選択していると言える。

(1479 文字)